

本書のタイトルは『日本の気配』である。なぜ、空気ではなく、気配なのか。空気読めよ、とは言われるが、気配読めよ、とは言われない。気配なんて読めないからだ。

今、政治を動かす面々は、もはや世の中の「空気」を怖がらなくなったように思える。反対意見を「何でも反対してくる人たち」と片せば、世の中の空気読めものを統率できる、と自信に満ち満ちている。「空気」として周知される前段階を「気配」とするならば、その気配から探りを入れてくる。管理しようとする。差し出された提案に隷従する私たちは、「気配」から生み出される「空気」をそのまま受け流す。それは政治の世界だけに留まらず、メディアの姿勢にしても、個々人のコミュニケーションにおいても同様ではないか、とも思う。

まったくベタな手口で恥ずかしいけれど、辞書を引いてみる（大辞林）。

「空気」 Ⅱ その場の状態や気分。雰囲気。また、社会や人々の間にみられるある傾向。

「気配」 Ⅱ 周囲の状況から何となく感じられるようす。

その場に流れている状態や気分を、社会や人々の間にみられる傾向を、国家もメディア

も個人も丁寧に察知し、そこから踏み外さないように心がけている。踏み外した時には四方八方から夥しい数の突っ込みを浴びることを知っているから、空気を熟知し、その場をやり過ごす。とにかく入念に。

辞書の説明が示すように、空気が「その場」で起きていることの「傾向」ならば、気配は「周囲」の状況から感じられる「ようす」である。何がしかについて議論しなければならぬ時、その議題に賛成する立場であろうとも反対する立場であろうとも、「その場」に近い人の意見ばかりがまかり通り、それが空気を形成していく。現在の宰相とその周辺は、空気の取り扱いが実に上手い。「国民の理解が得られました」と連呼する時、多くの国民の声を「その場」から排除する。3・11以降、あいまいな日本の心性を再稼働させているのは、「空気」ではなく「気配」なのではないか。

本書は晶文社スクラップブックで連載していた「日本の気配」の原稿を方々にまぶしながら、これまで様々な媒体で記してきた原稿を編み直した一冊である。編み直したとはいっても、ほとんど書き直している。これまでに、どうにも心地悪い日本の気配をほじくってきた、という少々の自負がある。掴むことができないのに、違和感がまとわりつく感覚。いったい、「気配」Ⅱ周囲の状況から何となく感じられるようす」とはどこで芽生えているのか。「何となく」を作り出しているのは誰か。空気読め、では見つからない、気配の在り処を見つけていきたい。